

原作と脚本

首藤 静夫

映画制作などの為の脚本は原作に添っていると思っていたが、そうでもなかった。

松本清張の名作『点と線』。中央省庁の汚職事件で鍵を握る某省課長補佐の心中死体が発見された。場所は博多の近く香椎潟、情死の相手は東京の料亭の仲居だった。重要な場面で登場する香椎潟と香椎駅周辺。「ずいぶん淋しいところね」と言って浜に向かう女とその連れれの男。読後に余韻を引きずる名場面である。

情死と片付けられた事件に疑問を持った地元の老刑事と、東京でこの汚職事件を追って博多まで来た警部補の出会いから事件の真相解明が始まる。

この小説をテレビドラマ化したものを数年前に見た。ビートたけしが地元の老刑事役だ。彼は独断で東京まで上って事件の真相に迫っていく。たけしの演技が鮮烈で頭に残り、主人公は原作でも執念の老刑事だと思っていた。ところが久しぶりに読み返すと謎解きの大部分は東京の警部補だった。これってあり？

『羅生門』。映画を先に見、原作を読んだのはかなり後だ。芥川の小説『羅生門』では登場人物はわずかに二人。羅生門の天井裏で生死をかけた、おぞましいシーンが繰り広げられる。映画の内容とはまったくの別物だった。後に知ったが、黒澤明監督は同じ芥川の小説『藪の中』を基に脚本を作り、『羅生門』からはその情景と題名だけを借りてきたのだ。これってあり？

もっとも「藪の中」では映画タイトルになりえず、黒澤らは知恵を絞ったのだろう。

『第三の男』。映画のラストでヒロインのアンナが墓地から続く長い道をゆっくり歩いて来、厳しい表情のまま画面から消える。待ち受ける主人公には一瞥もくれない。全体を象徴するシーンだ。ところが同名の小説では、二人並んで歩きアンナの手が男の腕に通される。ハッピーエンドだ。「第三の男」を暗示させる「猫」も登場せず、観覧車の迫力も今一つだ。これは、映画のヒットに気を良くしたグラム・グリーンが後日書いた小説で、そのせいか今一つだった。